

## 研究主題「問題を発見し、解決しようとする態度を育てる学級活動の指導の工夫 —学級や学校における生活上の問題の解決の指導を例にして—」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課

新宿区立余丁町小学校 主任教諭 佐藤 芳晴

### 第1 研究のねらい

国立教育政策研究所「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」(平成25年3月)に、21世紀を生き抜く力は「他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、よりよい解や新しい知識を創り出し、さらに次の問いを見つける力」と示されている。また、21世紀を生き抜く力の中核に「思考力」が位置付けられ、その思考力の柱の一つとして問題の発見や解決、アイデアの生成に関わる「問題発見・解決力」がある。

特別活動は、よりよい生活や人間関係を築くために、目標やその達成の方法、手段などをみんなで決め、みんなで役割分担をして、その実現を目指す活動である。また、児童自らが課題を設定し、解決に向けて話し合い、実践するための自主的・実践的な態度を育成する活動であり、先に述べた「問題発見・解決力」を育むことができる活動である。中でも、特別活動の学級活動「話し合い活動」は、児童自らが学級や学校における生活上の問題を発見したり、問題を解決したりする力や態度を育成するための重要な活動である。

しかし、小学校における話し合い活動の実態として、児童自らが学級や学校における生活上の問題を発見したり、解決したりするような話し合い活動が十分に行われているとは言い難い現状がある。都内公立小学校教員121名を対象としたアンケート調査結果からも、「学級の問題を児童が自分のこととして捉えていない」、「実践に結び付くような話し合いをしていない」、「問題の解決に向けた話し合い活動をあまりしていない」など、指導上の課題が明らかとなった。

本研究では、学級活動における話し合い活動において、まず、児童が自分のこととして問題を捉える「自分への影響を考える視点」が必要であると考えた。問題を発見させるために、学級や学校における生活の様子を録画し、全体で共有する映像資料を活用する。そして、問題の解決策を考えさせることで実践意欲を高めていく。このような手だてを話し合い活動の中で行うことで、児童が問題を発見し、解決しようとする態度にどのような変容があったのかを検証授業を通して明らかにすることをねらいとした。

### 第2 研究仮説

話し合い活動において、生活上の問題を自分の問題として捉えさせるために、映像資料を活用して発見した問題が自分に及ぼす影響に気付かせることで、より具体的な解決策を考えることができ、進んで解決しようとする態度を育むことができるであろう。

### 第3 研究の内容と方法

#### 1 基礎研究

国立教育政策研究所「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5」(平成25年)を基に、思考力の育成について分析した。思考力の一部を構成している「問題発見・解決力」は、話し合い活動を通して個人あるいはグループで問題を発見したり解決したりして、新しいアイデアを生み出すことで身に付くとされている。このことから、学級活動における話し合い活動でも「問題発見・解決力」を高めることが可能であると捉えた。

昭和 22 年以降における小学校学習指導要領等を分析し、特別活動の変遷について整理した。その結果、どの時代においても特別活動は、児童が学級や学校生活の充実を目指して、自分たちの力で問題の解決に向けて具体的な活動を実践することを意味する実践的な活動を特質としていることが分かった。

## 2 調査研究

平成 27 年 7 月に、所属校第 2、4、6 学年児童 183 名を対象に「問題発見・解決力」に関するアンケートによる意識調査を行った。

### (1) 「問題発見・解決力」に関する調査の結果

質問紙による調査の結果、学級や学校の生活において「もっとこうしたい」、「もっとこうしてほしい」と学級生活において問題を感じている児童の割合が、第 2 学年で約 50%、第 4 学年で約 42%、第 6 学年で約 21%と学年が上がるにつれ、低い値を示していることが分かった（図 1）。児童の聞き取り調査から、「学級に大きな問題はない」、「学級で嫌なことがない」と回答していることから、学級内の問題が自分に影響すれば問題として認識するが、自分に影響が及ばないのであれば「学級内に問題はない」と結論付けていると分かった。

また、「学級や学校の生活において問題があったときに、解決に向けて進んで行動しているか」という質問からは、第 2 学年で約 96%、第 4 学年で約 75%、第 6 学年で約 60%と学年が上がるにつれ、児童の解決に向けた行動の割合が低下していることが分かった（図 2）。

### (2) 調査研究から考えられる指導の手だて

上記の調査結果から、児童は学級内の問題が自分に影響がなければ「学級内に問題はない」と捉え、意識的に問題を発見しようとしないうえに、問題の解決に向けて行動しないと考えた。また、自分への影響がありそうな問題は何なのかという視点をもたせることが必要であると考えた。そこで、(1) 学級や学校の生活上の問題を発見させるための映像資料の工夫、(2) 自分への影響を踏まえ、解決策を考えさせるためのワークシートの工夫、(3) 実践を継続させるためのワークシートの工夫について開発した。

## 3 開発研究

### (1) 学級や学校の生活上の問題を発見させるための映像資料の工夫

学級や学校の生活で、今後自分への影響があると思われる問題を取り上げ、映像資料を活用して問題点をつかませ、解決策をイメージさせやすくする。学級会の展開①で、給食の配膳、教室内の整理整頓、校内の共有スペースの利用状況等の映像を見せ、改善すべき問題点を発見させる。映像を活用することで、全員で問題点を認識することができ、問題の共有及び解決策を考える手掛かりになると考えた（図 3）。

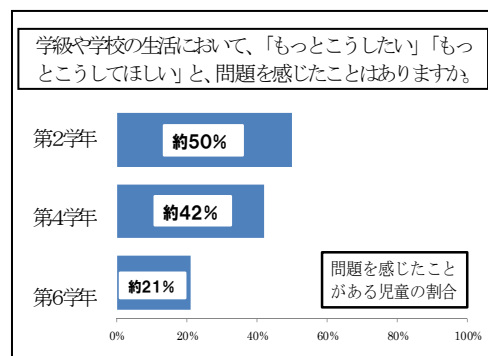


図 1 問題発見に関する意識調査結果（3 件法）

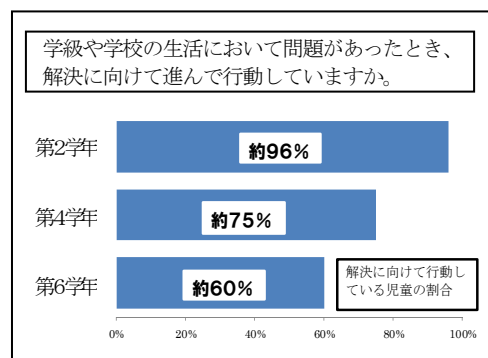


図 2 問題解決に関する意識調査結果（3 件法）

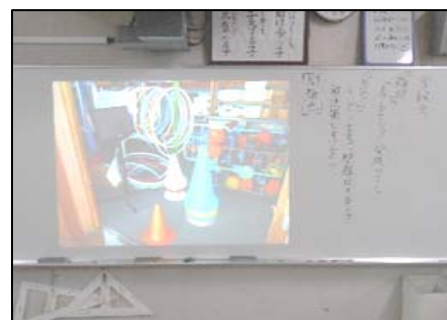


図 3 映像の提示

## (2) 自分への影響を踏まえ、解決策を考えさせるためのワークシートの工夫

問題を発見し、解決に向けて考えをまとめることができる話し合いシートを開発した。問題が、自分にどのような影響を与え、それがよりよい学級や学校生活を送るための障害になる可能性があることを考えさせることが、問題の解決に向けて解決策を考える意欲につながっていくと考えた(図4)。

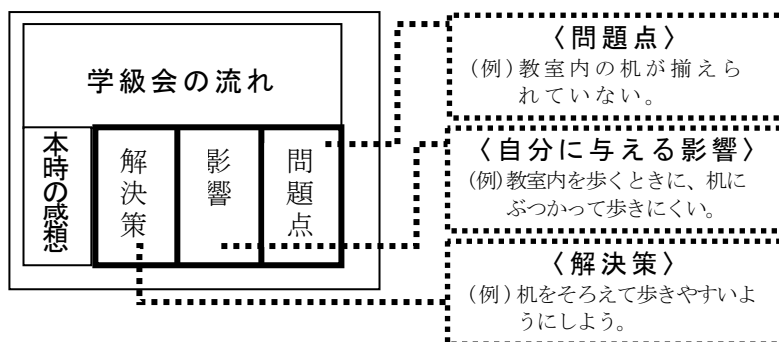


図4 話し合いシートによる問題発見・解決策の記入例

## (3) 実践を継続させるためのワークシートの工夫

意欲をもって解決策の実践に取り組めるように、自己評価・相互評価を取り入れた実践シートを開発した。帰りの会で、自分が取り組んだ実践の振り返りを各自が行い、自己評価と感想を記入する。その後、よかったことや賞賛の言葉などをお互いのシートに記入し、相互評価を実施する。また、帰りの会に実践を発表する場を設定し、教師が児童の活動を価値付けるような話をする。児童にとって、友達や教師から活動を価値付けられることは、実践に向けて更なる意欲の向上につながっていくと考えた(図5)。

図5 実践シート

## 4 検証授業と児童の変容

### (1) 検証授業の概要

第2、4、6学年「学級活動(2)」において、以下に示した指導計画(表1)で、問題を発見し、解決しようとする態度を育てる手だてを取り入れた検証授業を行った。その後、児童の問題を発見しようとする態度や解決しようとする態度が、どのように変容したかを意識調査や実践の分析により検証した。

表1 問題を発見し、解決しようとする態度を高める指導計画

	学習活動	○学習活動	・指導上の留意点
導入	めあての確認	○司会を中心に進行する。 ○学習のめあてを知る。	・学級会カードと付箋は、あらかじめ配っておく。 ・話し合い活動をするに当たり、学級目標を意識した話し合いになるように確認する。
展開①	問題の発見と解決策の構築	○映像を見て、問題点を見付ける。 ○その問題点が、いずれ自分の生活に影響を及ぼす可能性があることに気付かせる。 ○問題点の解決策を話し合う。	[映像資料](教室、廊下、給食、掃除場面) ・発見した問題が、自分の生活にどのような影響があるのかを考えさせる。 ・よりよい学校生活にするために、自分ができる解決策を考えさせる。また、そのような考えになるように、適宜助言していく。
展開②	実践する解決策の順位決め	○自分が取り組むべき解決策を付箋に書き、話し合いシートに貼る。 ○解決することを決めた理由を添えて発表する。	・自分がどのような活動を行うことで、より学級生活が良くなるのかを考えながら、グループで話し合いながら、取り組む順番を決める。
終末	実践の振り返り	○「活動に向けてがんばること」、「今日の感想」を記入し、発表する。 ○教師の話聞く。	・話し合いシートを周りの友達と見せ合う。 ・意欲的に実践に取り組めるように、児童の活動を価値付ける話をする。
実践	日常生活への定着	○自分が決めた実践を行う。	・帰りの会で実践シートを使い、自己・相互評価を活用し、活動の意欲を高める。

## (2) 児童の変容

### ① 問題を発見しようとする態度

問題を発見しようとする児童の割合が、第2学年で20ポイント、第4学年で16ポイント、第6学年で46ポイント上昇した(図6)。児童への聞き取り調査において、「学校生活であまり問題意識をもって周りの様子を見ていなかったが、自分への影響を考えたことで問題を意識するようになった」という回答があったことから、映像資料や話し合いシートを活用し、自分への影響を考える視点をもたせることが、学校生活上の問題を発見しようとする態度の変容につながったと考えられる。

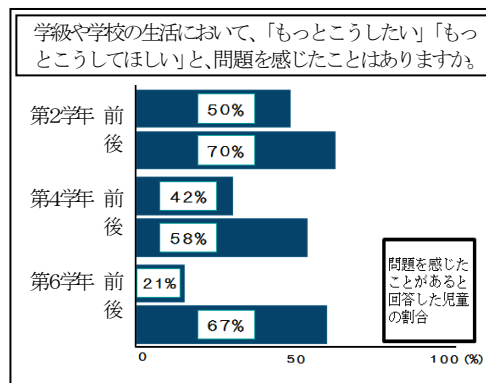


図6 授業前後の問題発見に関する意識調査

### ② 児童の問題を解決しようとする態度

解決に向けて進んで行動している児童の割合は、第6学年で18ポイント上昇した(図7)。児童への聞き取り調査では、「教室がきれいになってうれしい」、「学校のために働くことができてよかった」との回答があり、自分たちの取組により生活環境が改善されていくことで喜びを感じ、活動意欲が高まったと考えられる。

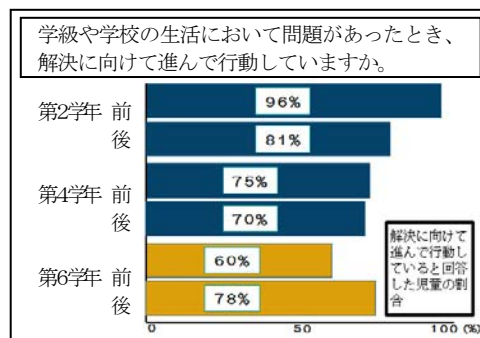


図7 授業前後の問題解決に関する意識調査

しかし、第2学年では15ポイント、第4学年では5ポイント低下した。児童への聞き取り調査を行うと、「問題点が何かが分かった」、「自分が思ったほど行動していなかった」との回答があり、検証授業前は「行動していたつもり」であったが、検証授業を通して自分たちが問題の解決に向けて行動していなかったことを自覚し、自己評価が下がったためと思われる。実践シートを活用したことで、自分と他者の活動を比較し、自分の実践における態度や意識を客観的に振り返ることにより、このような意識の変容につながったと考えられる。

## 第4 研究の成果

- ・ 映像資料を活用することで、問題点が明確になり、問題を解決する必要性を感じることができるようになった。また、問題点が何かを理解したことで、問題の解決に向けて意識しながら学校生活をする姿が見られるようになった。
- ・ 話し合いシートを活用することで、[問題→自分への影響→解決策]という流れに沿って話し合い活動を進めることができ、実践に向けて活動の意欲を高めることができた。
- ・ 実践シートの友達からの記述は、児童の実践活動の大きな励みとなり、今後の実践に向けて活動意欲を高めることにつながった。

## 第5 今後の課題

- ・ 発見した問題点を、自分の問題として捉えられるようにするための効果的な発問について、更に追究していく。
- ・ 問題を解決しようとする態度の定着に課題が見られた児童に対する指導について、更に有効な手だてを追究していく。